



あつた巻二篇

4
366
4

四



多岐の人相もたしめけしむ何ぞんく夫婦は
人相くむしむるのれ傳受たを懸く下中を

○翁の曰何ぞ心相あり河川に相を交す故

このふまは体も不和合の相も合に片は人相の

傳受かこころむししく武國小中此ありは夫婦

あやそく朝夕喧花は舌此絶りたうくはた志も人故

そやゆきとそ隣家あり

○諫度言しつ奇人ありてまいつ是を争毒に

あひさめく是自せしかはと夫婦不用てゆ

そのれをゆきあひまきそくにゆりい替夫婦乃

そのと我が方にまひ十分小馳まをゆり初夫婦小

じうい中けりいそ方あ人も常に不和合く

まはぐくちありつて禁まいつ実見まればも

かやも不用まらひまははかたけも世に

日夜志ありとやすい世小かかたけもす

家治るは力と骨一うむしりあ我出まら

かゝるくもあまりにつと存し付し人
地も亦此事をよとせりて心いあまを不存に
けいこかくされき言り中上事るれ明
しりい我多人の隣家にすじのきとくよはにひ
たれりそ又よに中夜悪に難をもさなくま
三年一守ふはくりりすれをだまに悪事い
かゝりやうに風雅をうき事なれぬく明
しりい三年又はたにく中夜入一し亦公るに夫婦

ともしきりにまたる親切られ切度相い何の
めりりい三年一守ふはくりりすれをだまに悪事い
かゝりやうに風雅をうき事なれぬく明
しりい三年又はたにく中夜入一し亦公るに夫婦
○妻女房にむい母己がやれんむるは様れ
新小破去ぬりて星皇く小豆をたき地まき
おて居る悪く悪くけきい○妻とてまて
あかしくはくまぬれ家通く今日か何れ



和合集久付巻

○身主大に腹をこめて。こまき其しくおろくま。

秋のそとに...

秋のそとに...

この神がやまの神やが大やれまら此の神が

悪はまはし今い。○女房あうらひ。モウまあしや

たうまい。ぬやと般着の妙ふ。顔色よく飛かつて

身主は白昼に冷ひひしし。十七にせり。また

言はゆきあうらひ。夜あ宗道が相方の身主に。をら

かり。あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。

天地神明を宰り。あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。

世ふせあうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。

四時法をん。あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。

地流し。あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。

あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。

あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。

あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。あうらひ。

下れは成りてもあらずに夫婦も少下の句
 ともくおちる家へゆりてまればいり極く書や
 此方れ夫婦あんくの毛カラ日々にむらり感
 こそは後いよまに一向もよめやにちるべし
 笑してはわね極むおい又々例のあんくを仕む
 身ま書ふしめて己今口下の句に十めん
 かなやいも極つらむに一忍にせんまで
 小くい鼻横つらつらうい共し

かんらんすうが家此福徳
 小はちりーがまてよ早でハトの句かひに
 あのもてましかうもあぬ
 鼻後がやたらしは極く極く書
 かんらんすうが家此福徳
 こそいも下れ句い大はち極く今朝六ヶ夜
 せんく極く書す人しこくさ極くあつる
 こそあれ初めその中へ家通のたまりり下れ

白くはるまじ。でく。私が右のど、らんをて

悪性か。親父が泣きけつふくわ

中けくき人いりや。そのこあんまん

ゆきまきや。カウデハるをでいれがよのりつさが

まうげ。涙は少く。泣きまて

まけくはくいりや。そのこあんまん

こりても。様はいぬたうけし今日。びり。様

業引くんまき。その身が。ゆりあられ。

① 史傳。思案。業くをあら。

おんはる。鼻のつは。たれめ

かんじん。家がぬく

② 素是。ゆて。横。むら。扱。よく。色。身。ゆ

おん。こ。よ。ト。か。福。徳。く。そ。ま。さ。く。お。ち。る。ま

赤。い。し。ん。ね。色。か。く。ま。ん

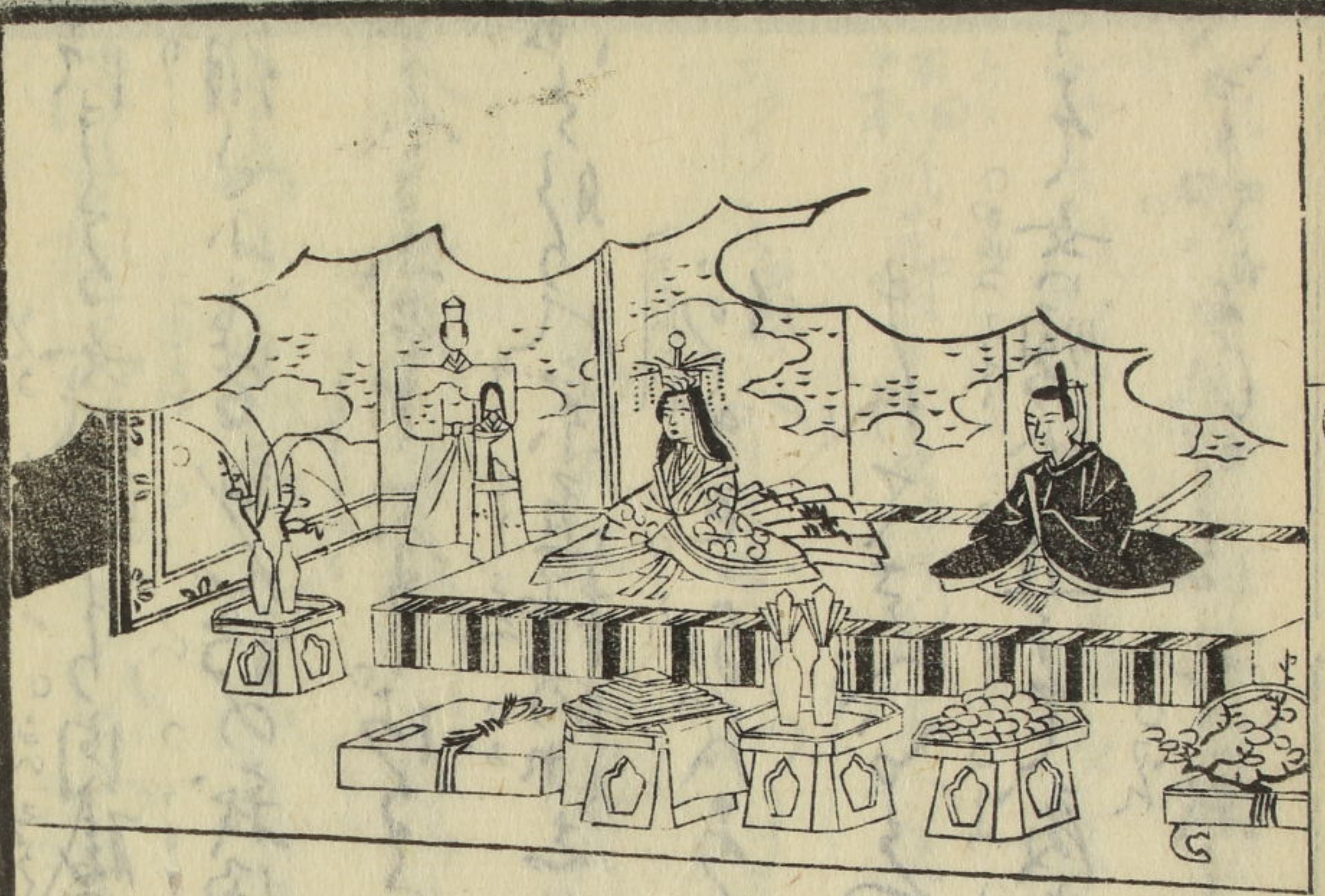
何。ゆ。も。家。と。あ。や。り。願。い。て

ま。も。し。く。ら。あ。こ。も。身。安。心

心奪したるでござりせん。○是れ曰扱くゆくこそ
出されたりと女は道るそらにありてこそ心奪
福も壽も子孫の業も出されりとたに夫婦和合
まじり鼻今までい何の心もこしうらむらうら
あはれり。鼻の所もきれたるあり
今もせゆと海たりと恨む。○書の上にて平伏し
まじりあはれんもあはれん命やるは活ねた女は
はるばるあはれんかあはれんくらとあはれんはあはれん書の上

はるばる女は道より肉體のやれりらるるがたるなりと
相もふも皆も心語の我恨れ救に家もよも力を不
す人ふも是れ今も。あはれん心奪の心もはるばる
あはれりは宗道柳のいれりりして
何れも心奪あはれり順ひり
まけてまへりやこそ方安せん
こそ女順ひ道こそ度まらんこそいれりまけてまへ
りや。あはれんが心奪と我も我にみくまれ南へり

（一）



〇 新古今和歌集

新古今和歌集

十三

今んがほきてこれに扱く安心安楽世界であらうまん。

○夫の回りをひいてをりだたる月(こしも)其の

非(ご)れ知るえ来女を世(か)る(と)は(ら)そん(ら)く(さ)ま(さ)く

女(め)を(と)り(ふ)め(と)お(か)な(ま)あ(ら)く(あ)い(て)海(う)へ

と(ま)め(き)川(が)を(と)り(ま)の(神)め(が)千(よ)ユ(サ)イ(キ)と(腹)を

ま(ま)に(酒)を(の)み(を)る(つ)て(業)を(さ)し(ふ)く(中)ふ(と)

可(あ)い(か)て(こ)が(ほ)ろ(こ)い(を)腹(は)ま(て)ヒ(ヨ)ツ(ト)不(ふ)埒(ち)あ(る)

ま(い)と(あ)り(る)因(い)果(くわ)の(火)は(車)の(下)奴(やつ)新(あら)す(其)心(こころ)を

ま(ま)を(業)も(た)や(り)ら(家)業(かぎ)情(なさ)け(酒)の(た)悪(あく)性(せい)

世(よ)の(女)の(中)に(女)房(むすめ)に(鬼)を(た)ら(め)と(身)は(罪)の

深(ふか)き(ま)ら(業)を(と)り(な)る(く)は(ま)を(け)て(修)羅(しゆら)の(ら)ま(さ)い

う(た)ら(ひ)の(ま)れ(を)成(なり)あ(び)る(不)和(わ)合(が)の(中)で(と)り(と)り

ま(ま)し(た)ら(し)ま(ま)め(ら)め(の)い(世)の(中)へ(ド)ウ(テ)モ(甲)力(ちから)を

の(こ)ろ(を)あ(い)ま(し)ら(何)も(さ)知(し)ん(嚙)太(たい)明(めい)神(しん)と(致)ひ

と(る)人(ひと)直(ただ)れ(ま)し(い)ひ(か)げ(ひ)を(し)な(く)と(切)り

い(と)す(べ)し(と)て(是)を(ま)の(罪)を(悔)ム(て)

女房におしする物と知りかゞ

直と廉挿す。せぞおらわ

○書波をが。おらに知るまで夢にかいら成

ほもやいどるらぬ。汝の其清言を實心ふれら

たいる。かく女中もあいか。夫がけつら成

や。我を知らぬ。つあう心がかうら。えん

そく。へに拍病がやれ。ちやうた。やのかん

ちやうどやのと。よまの成み。うら。んぞえ

うしておらう。好う。嗅。患。のかのう。ゆたをそ

我し。ひら。火の車。ふ。う。て。お。さ。う。う。

すべて。ま。い。そ。れ。を。む。く。き。を。表。と。は。は。と。知。家。

職。家。業。此。心。芳。多。く。そ。う。上。妻。あ。る。は。類。を。い。め。

世。の。女。信。多。た。若。者。は。そ。の。何。ら。と。時。に。真。枝。の。

酒。も。あ。そ。い。も。何。ぞ。ぎ。れ。も。け。た。な。ま。ぬ。ま。の。

本。ら。ふ。席。が。お。そ。い。と。あ。や。ま。と。れ。う。

外。西。の。女。中。に。や。り。う。ふ。言。が。あ。が。す。ん。だ。

こころい貝此鹿まろく心の川白を子孫
たしとらも沙路とすかといちんふもまた
をけ女のんぬきまふやうふてをらそ
のる恩といけのるふやう棚の上あらり
おらこむらぬやれんてむら形り
あふれ遠くうつてそのかきこむやあ
んふかろんぬ先世を悔てうやまに
夫いれそご入相し知りかろ

新よのみとらそ思ひがうれ

水ま婦にまた大勢ひてむらと合
の中ふあしうの程あありそひまた
相言しむは自傳し家室解りて
子孫目お及長久たやうとらやま
あふもたしとらありとらにあらば
汝もまふ此書あはれた今も心相く
忽夫婦和合子孫解業相く

○女おんなちち一い感かん心しんしてつ憐あはふふ世よにああららががららん
 御ご傳でん交ま又また得とくくははららももくくららにに安やす樂らくああららん
 かかららああららししししららららびびくくゆゆららぬ

享和二年戊仲春

席

貧富乃かぢかす何も腰のくちあは
 小徳のくち生は身は歳や家初をす
 か一ほくくもまぶも四地もす心あは
 何もまを種バ形かたちもはあ安樂を初らは
 空から路みちが富くもくくしむるまをあは

和名書

此の...
 中...
 所...
 り...
 と...

女...

者...

波太良加次以祭
 可徒良も於母
 止母...
 也志武...
 祢不理目仁奈苗



☺



海洋志炎志
 古苑及母及父志
 皇田志民志
 由目之申古楚の
 被美祭由目南
 那

海をめぐりて海は終る日暮を事いしまじし一て破り
 白へは怪合の外よ業とそりあず釣ふ八星をいしてそ
 つとに出る夜ハ靡をたひひて入子屋を豆脚とそり代
 かし丁雅とかけて家因ごうくくせども。自ら
 斤時休間をく。いさつくやうふかあまらうもそりあけら
 には火の上張もほりうもぬ氣性おれどもあいの
 ふ義もらけつけぬ。律義一筋一心不乱高貴の

食み非ともぞ別しき心なほもひるげふ歌をり
可多。時至る時これ王我もいづく汝もつけ
いそは家とちりきやへせんとおしごも汝求心と
うらむをれ家業一途ふはゆめをこくあはれ
けきつ付入事ハ扱おのへあ付事もたうさる
しお侍をかん海の今日只今。汝大さ不歎心は
不足と起し家業は倦の心をせす。盗人もも
あまハ入易く。汝不足れをせして我をもし

振く也。たごちに來りて命を奪ふ。迷ふ受命さ
あり。是元來我わらうよわらふ。汝がすきく求む
まづおや。古あは氣とてさまをきこれ。あひあ
あよあよりいづまば我子同前。是ハ磨く宿を
細云中の野人の御縁と忍たり。は名おの通
まて我もなんちうあよりけす。命を食之味とて別
うらむとちあるでハたし。今とハををちと助け
恨お成し。が。お替りし。けは。汝と古とあや

近人トとすきハ泣ハより泣ハ踏ハとゆれバくつとさ
まきおちの當ハであとぐハ幾ハおんトとすれどハさう
あをぐハあふハこもハせむハせむハあけらハあハされと
され水ハ責ハ火ハせりのくハよりハあハ責ハこそハせりハあ
きと豆ハ脚ハハ遠ハるハとハんハ合ハせハちハいハさハれハかハきハとハさハりハきハり
まハりハ行ハきハとハ正ハとハあハげハ笑ハ先ハはハふハりのハやハさん
習ハ責ハとハあハさハせハるハいハんハぎハんハあハるハ笑ハ列ハもハあハりハハハかハこ
とハ試ハあハりハるハ豆ハ脚ハハ天ハをハ抑ハでハ感ハるハかハなハくハ悔ハてハかハく

らハずハ百ハ痛ハのハ中ハにハ分ハてハくハらハきハるハ責ハはハあハりハも
我ハがハりハ出ハすハ我ハ過ハをハふハせハりハらハとハをハ社ハをハずハ有ハ難ハ
信ハ静ハ體ハのハ御ハ代ハはハせハまハてハゆハぎハ其ハふハ小ハ楽ハ紙ハをハやハめ
不足ハあハりハをハなハせハハハ愚ハ痛ハとハやハいハんハがハのハほハとハ紙
知ハれハぬハといハもハ彩ハわハゆハりハ何ハもハ或ハるハ表ハ紙ハにハはハる
事ハ何ハりハ君子ハハ素ハ其ハ位ハ行ハといハらハをハ結ハ合ハ息ハとハすハまハバ
心ハ事ハにハあハりハといハれハたりハ又ハあハちハのハ法ハ寺ハのハ御ハせ
よハいハらハぎハやハらハのハ六ハ字ハとハちハまハじハバハ二ハ世ハもハ安ハ樂ハ何ハりハと

ひこてい

六

わたり我息方と身を働さ。備せすにくせしハ
はともたに福なる。我思慮心より其位は素す位と
面と知れども。又我身の経れあふきやう。汝知す。是
心と起して人とうも。天命にそむきては。然らけ。
費よあつて我とが。過を知る。あやまちを知る。是
近。乃は近きハ人の人たる。あふきまら。ば理のわいも
口く。ハ。河より。出て我者。げんのおか。りて。知れ。て。責
務。つて。安。楽。の。人。ハ。汝。の。も。と。を。奪。ぬ。夫。命。と。さ。ら。り

し。福。と。や。い。人。徳。と。や。い。人。今。笑。先。生。の。呵。責。と。我
師。匠。才。子。と。う。つ。思。ひ。よ。わ。げ。の。深。切。と。思。ハ。げ。う。ハ。思。と
お。り。引。き。ま。の。ま。は。い。く。よ。つ。の。き。を。捨。て。心。の。誠。意。と。ん
と。人。死。す。時。に。あ。ら。は。し。む。い。ざ。ん。も。豆。脚。が。ま。り。ひ。を。あ。り
笑。列。ハ。入。さ。う。か。ん。だ。か。何。ん。ま。り。喜。ぶ。せ。ね。あ。り。豆。脚
あ。ら。う。と。ん。ま。を。せ。ハ。方。は。ま。り。び。た。る。笑。之。神。ハ。いつ。く
へ。や。消。た。ら。ち。つ。と。う。う。を。ん。さ。う。ぞ。ん。が。う。の。終。も。わ。ら。ハ
あ。も。火。入。ハ。火。入。で。多。多。新。を。ま。よ。り。茶。碗。ハ。茶。碗。で。茶

末社志しむるぢものあひまきしれは是の成。そをも
かゝりぬま。いつさするや新けすこと。
こがた。そのふ思しむるがわいののじや新けし。
すいふんく。ちぢぎきういの笑列小者あやうぬ
や。まよりいまの細ふころくわやう。ぬありの
才一ハ笑ときふをすて。だ天命に何すー
是と念付て福者とぞいふ天命にかあひ足る知
人と福者ともいふ者ともいふ念ときふと福やと

あまきしむるもぐ小念。然があらはげん。この世の
我とたてのいふも。世もこまより我子をば
すいぶんくつがすま。とまた人くア志しわう。
神心のちちのれとまハ。精を日よハいせんた。
念こせぬ思案がま。とて退席すもま。いんげん
まぐく已ハ。してが。ちんくの大意天のま。ぬ
せよ。ぬが熱し。てなる小なる。望のま。たうたら
まら。望人孝子のま。のた。まらハ。孝り。大。ま。

いかにして既中とがづり袋をかげ。提を持つ。け
祈り物もやうにせよ。はわさず。まづ一紙の
既中とがづりて人を忍ず。何れも後たえず。あ
ず。ほくす。す。ゆ。新。婦。よ。かん。かん。袋。の。結。と。つ。く。
襦の門と。き。こ。あ。ら。に。と。あ。り。て。あ。り。り。と。か。け。さ。よ。ハ
忠。親。よ。ハ。孝。の。子。極。と。も。あ。さ。だ。か。つ。て。も。投。て。も。ま。れ
あ。れ。で。も。き。び。う。い。な。し。れ。あ。ら。よ。る。ハ。物。も。と。た。ら。る
魚。の。の。食。物。と。つ。り。て。い。づ。り。ま。り。ふ。ま。し。り。つ。て。も。

ふ。足。の。あ。い。な。ふ。は。足。親。で。や。く。あ。く。人。と。下。目。さ。ね
や。う。ふ。の。脊。紐。な。り。是。大。下。の。縁。紀。の。大。略。又。我。と。も
む。つ。り。が。い。は。び。い。で。の。ゆ。に。安。賣。し。て。お。い。て。ま。う。と。結
お。き。つ。や。き。烏。帽。子。か。り。き。ぬ。き。せ。し。き。さ。り。り。く。雲。上。め
き。に。又。お。お。意。を。網。と。釣。竿。と。持。し。ハ。ち。や。を。お。て。ち。後
の。業。ち。の。い。れ。な。し。和。合。し。礼。ハ。和。と。以。て。貴。し。と。す。の。次。女
ち。ま。の。法。人。の。す。ま。の。後。と。わ。え。ん。と。い。ふ。結。と。あ。り。く。き。致
れ。釣。竿。と。り。ら。し。才。網。袋。賣。ハ。父。母。ふ。け。た。を。あ。く。て



お出し

子先

おや
り
り
り

欲
り
服
ろ

え
ん
ど

お
や
ら
ら



苦学ハびんしう先生をこれ仲あもがろくやぶき
 一 学おふりでもすまじきまじき人よまじきられ
 先づしんがたまがなる迷惑を得たれどもうちを
 ぬてしんきそ我も職をばおこすずとあて
 欲といしむ大慈悲公なり又我ももあんまを
 承な身てもねし。我が申岩れと大悪天もたち
 ずくわあり不足とらハ皆お意よらるなれども
 しんきとすして面これに職分と大ふすたで

神といふ。母もが業もなる邦。が業といふ。親に
 ちあ。急をつくすのが親れが業。子しては孝ひするが
 子のが業。が業しては忠義とするがが業。の家の
 業。毒しては史かき。そのむくが毒れが業。
 朋友ハ。信をつくす。友なるが業。兄弟仲よく高
 人の高し。おこす。百姓ハ。農行。其仲ハ。職人
 細工とするがが業。なり。是を法りて。しんき
 木村國古 悉皆極神是とつと免びをこる時ハ

中本國土悉皆會神。さしせんを方も子足さおこ
せし時小徳乃具不殊を會神と化し。我といのれが
我も又會神と現してとも小女を責し。我
もまたぬ自然の責。つぎ會神とくらふなり
でハカ。又我會神と現しせりんとおりのを
わく。つぎハたぞおんと思へども。神カ女業は負
我とくらむむ女をせりたり。世れ中不若ハかき物
に我とむがふと求りてくらむとせする。負とまき

ハカつて會神の一味とあり。強て又後とすくのも。
お多別のお社申く。只天乃海せが別種。法
りたぐも。ようぐもやこりつて。法乃具又會神
現ずるも。むびんしうに現するの小人の目ハ甚
見く少くひものトヤ。本をたが業現しつる
と。たしてハあいつハは方のびんがう神トヤ。志る目
那のあくるの帯が。細びんしうと現し。本綿の
縮細會神。先祖は通るでふどやうなく。すんで

つてこい

十五

きこふと榮耀とをせむといふ普法を志す。現
すれば家内の公。自然にちごり。は肉を小ハさしでの
種ありうり。息子や手代ハ色の種やわきし種が
宗うたや。そが乳とて末おさゆ。ぬはどおハ世間ハ
鼻を少。風の種や。病種や。ハ百萬の種。ま
種達があつ。海川て先祖のあや。及。こと。きこあ
拂ひあて。化人のおとなる。又始末。よいとて
あつ。じちやうに。各びきて。家内の者。と。困窮

させ。い。きつ。く。化人のお。吸。ん。人。
のど。あ。して。ハ。我。も。き。ら。く。き。ら。は。いて。き。ら
つき。志。ま。ひ。の。者。多。く。是。皆。貧。乏。種。の。た。り。又
各。れ。而。特。の。惡。病。の。種。れ。而。為。り。て。皆。身。び。い。き
の。ま。き。だ。と。し。な。り。け。身。を。い。ま。す。身。ハ。我。お。
化。れ。と。の。う。我。と。の。い。ま。今。又。百。年。の。ま。り。ん。よ。
け。さ。た。ぐ。り。も。我。の。な。ぬ。ハ。我。か。だ。ふ。足。と
り。六。何。の。ぞ。り。け。が。何。ハ。何。お。と。福。と。難。ハ。

